

---

# 旅路

馬路キレ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅路

### 【Zコード】

Z5219D

### 【作者名】

馬路キレ子

### 【あらすじ】

順風満帆に走り始めたはずの恋愛、しかし…。交差する二人の恋  
愛短編。

(前書き)

読む前に注意

この物語はフィクションです。

実際に存在する団体名、役職名などは一切関係ありません。

描写に関してあえて端折つてある部分がありますが

そこは想像で保管してください。

## 1 私の場合

目的地も決めずに始まつた当てもない旅路。私たち一人の旅路。

若葉に露が溜まる寒い朝も、真っ直ぐな日差しが照りつける暑い昼も、

日が落ち窓から見える空が曇る夕暮れも、暗闇迫る深い冷たい夜も時代が作つたボタン一つでかけられる携帯電話と、伝言箱が一杯になるほど送つたメールが示すように

共有できる時間、暇さえがあれば一人は何時でも一緒だった。

人様から言えば禁忌とされるべき私たち二人の旅路。

でも我慢なんて出来ない。私はなんて我慢のできない人間なのだろう。

キラリと光る眼鏡をかけ、小気味いいチョークの音を教室中に奏でながら

ピシッと決めたスースで教壇に立つ貴方の背中にどりつしても愛おしさ感じてしまう。

そして私は貴方と旅に立つことを決めた。

春暖かな4月の空と舞い散る桜の花びらが私たちの旅路を祝福してくれた。

旅を始めて2ヶ月が経つた。

この2ヶ月間、嫉妬と独占欲が強くなつた気がする。

貴方が「可愛い」と言った物全てに嫉妬し、貴方が「欲しい」と言った物全てを取り上げた。

独りよがりな私と従順な貴方の旅路は、小さな躊躇の連続だつたか

もしけない。

様々な局面と遭遇し、その度に私たちは衝突し、仲直りを繰り返し乗り越えてきた。

協力し合えば、一人はどんな困難も解決できると信じていた。

教え子と教師。

考え方、感覚、事実に襲い掛かる世間の目。

その差は歴然としているのに、どこか似ているようで似ていなくて旅路。

貴方は私、そして私は貴方。

私たち二人はこれからも旅を始めた事を後悔しない。

そうだと今も信じてる。

## 2 僕の場合

目的地も決めずに始まつた当てもない旅路。俺たち二人の旅路。

教師と教え子という奇妙な出会いから始まつた二人の関係も、もうすぐ3ヶ月を迎えるとしている。

ワガママなアイツに振り回されて、俺はいつもクタクタだ。  
従順だと思われるのは勝手だが、実を言うと支配されるのはそんなに好きじゃない。

毎日メールボックスを開くことに目に入つてくるアイツの拙く他愛もない文章。

いちいち返信するのも億劫になつてきているのを感じる。  
だが、なぜだか俺は返さずにはいられない。どうしてだろうと考える。

同じ旅路を行く者だから？世間の常識だから？  
答えはまだ見出せない。

ただ一つだけ、アイツとの旅路で判つたことがある。  
アイツに出会つて間も無く気づいたことなのだが、  
自身すら見知らぬ自分の一面をアイツに『だけ』さらけだしている  
ところ事実に。

それに気づかせてくれた分、俺は幸せと考えるべきなのだろうか。  
それとも不幸と考えるべきなのだろうか。  
けど、まだ一人の旅路は続いている。

### 3 私たちの順調な旅路、友人の小さな告白

私たち二人の旅路も8ヶ月が立つた頃。  
さして関係に関して噂もたたず、旅路は日に日に順調さを増していく  
つた。  
この密なる学園生活もあと少しで、解放される。  
年相応の子なら、これから進路を憂い、考えるべき時期にさしか  
かっているのだが  
私は今も貴方を征服する事で頭が一杯で、進路どころではなかつた。  
幸い私の両親は放任主義で、裕福な家庭環境の事もあり  
まだまだ自由にやつていい時期と、勝手にタ力をくくつた部分  
もあつた。

「ねえ・・・さん? 聞いてるの?」

「え? ああ、聞いてます。聞いてますとも」

日差しが強い教室の窓際。

私の横の席に陣取る、笑顔の眩しい私の親友が話しかけてくる。  
物思いにふけっていた私は、恥ずかしさを隠す反面

不審に思われてはいけないと思つてとっさに他愛の無い話で返す私。

差し込む太陽の光に白い歯を光らせ、微笑みの似合つ彼女との付き  
合いも結構長い。

お互に付かず離れずを繰り返して、適当な距離感と適度な刺激を  
分け与えてくれる彼女を

私は好きだ。親友と呼べる友達の中の一人だろう。

でも、そんな親友の前でも、私は貴方の事を思つて妄想にふけつ  
しまつ。

大人しかつた思春期を今猛烈に体験するように、遠くなつた少女の  
自分を埋めるように

私は貴方の事を考える。同じ空間を共有し、同じ空気を吸い、教壇  
に立つ貴方を。

「内緒にしてほしい」とがあるんだ・・・

「何?」

「私ね、告白しようと思つてる人が居るの

「へえ・・・誰?」

いつも快活な彼女にしては妙に口の辺りをモゴモゴさせていた。

余り興味が無さそうに親友の話を聞く私。

失礼極まりないと思つて

「あのね・・・ センセイ」

## キーンゴーンカーンゴーン

いつも調子ではない小声で彼女が言つ前に、授業開始の鐘の音が大きく響く

私は我に返ると、親友の思い人が誰なのかかも問いたださずばつが悪そうにそそくさと自分の席に帰る親友の背中を見ていた。

「そつか、あの子も恋してるのかあ」

私は小さくつぶやくと、何事も無かつたように授業を受けた。

次の授業は、私の得意科目。旅の片割れ、恋し愛する貴方の授業。太陽の差し込む教室の中で、私はまた物思いに耽つていった。

親友は、来春就職するらしい。

真っ赤なスースを決めて、私たちの前ではにかむ親友の姿は本当に印象的だった。

## 4 僕たちの小さな躊躇、小さな出会い

俺たち一人の旅路も1年が経つた頃。

教師と生徒の間で関係を持つこと、ともすれば

お互に一触即発の时限爆弾を抱えているようなものだが

まだ寒さを感じられる3月某日。教え子のアイツが卒業を迎える」と  
によつて

この旅路の最も危ない橋を俺たちは無事渡り終えたのだ。

そして、ひょんな事から、俺はアイツと一緒に暮らし始めた。  
最初の頃は、俺も若さゆえか未知数の事物に対する冒險心が  
甘い期待感を秘めた妄想を支え、膨大に膨れ上がる妄想を試験、体  
験することによって  
絶対上手くいくと思つてた。

・・・けど現実は違つてた。

四六時中一緒に居るつてのは、どうも落ち着かない。  
不自由の発生はストレスに変わる。でも舵取りさえ間違わなければ  
これはこれで楽しいつて考えながら三ヶ月が経つた。

8

久々の大ゲンカ。くそつ、びつして俺たちはこうこう方法でしか解  
決できないんだろう。

どう考へても俺に非はねえ。でも、そんなこと言つたつてアイツは  
認めないだろう。

始まりはアイツの些細な嫉妬だった。

教え子の一人から届いたどうでもいい一通のメール。

思春期も過ぎた頃の成熟へと向かいたいという背伸びがメールの文  
面に反映され

それがあまりにも『利きすぎた』のだ。

びつやからアイツには刺激が強すぎたらしい。

そんなこんなで猛烈な勢いで家から追い出され

俺は、まだ春遠い寒さに耐え切れず一軒の飲み屋へと足を運んだ。

静けさが包む落ち着いた店の雰囲気に俺は誘われるようになり

飲み屋のカウンターに座ると、きつめのカクテルを注文する。

ヒゲの生えた初老のバーテンが、俺のしょぼくれた姿に何かを察したのか

ニンマリと俺に向けて笑みを向け、カクテルを運んでくる。

「お客さん初めてだね？とりあえずこいつはサービスだ」

ニンマリと笑うバーテンに対して「お前に何がわかる」と不機嫌そうに俺が

強めのカクテルをぐいっと口から飲みこむ。

「いい夢を・・・」

バーテンが意味深な台詞を吐いて俺の前を去る。  
どうやら次の客を相手にするらしい。

「・・・ふへえ・・・」

口腔内を程よく刺激する、キツイそのカクテルを2、3杯やるつたりに気分を良くした俺は

そのうち、いつの間にか隣に座っている女の客が気になつた。

俺が知っている顔に良く似ている。

肩まで伸びた黒髪に赤いスース、黒光りする革靴とブランド物らしいバッグ、

椅子にはクリーム色のコートがかかっている。

俺より少し小さめだが女性にしてみれば身長は高いと思つ。

どこかで会つたよつた、どこかで見知つてゐるよつた氣がするが  
誰だかは思い出せない。でも誰かに似ている。

酔つてこゝにとを武器にするのは狡猾だが、いい手段だと知つてい  
る俺は

その女の密に失礼と思ひながらジロジロ見る。

「何か私によつですか？」

女が俺に話しかけてきた。

そして俺はそのまま酒の力を借りるよつて、その女と話をし始めた。  
幸い、俺も彼女も相手がいなかつた。

他愛ない話からし始め、碎けたといふでお互いの身の上話をもし始めた。

「・・・へえ・・彼女とケンカして・・・追い出されたつてワケね

「なるべく口だけの内緒にしてほしina。男としては恥ずかしい  
かぎりの話だし」

行きずり同士の話は止め処なく続き、店の中での時間は無限にも感  
じられた。

が、楽しい時間ほど過ぎるもののはない。

俺も酒に呑まれながら、薄暗い店内に飾つてあつた古ぼけた時計を見  
る事

それだけは忘れていた。

「あなたと会話するのは楽しいな・・・だけど、やつやつお別れの  
よつだぜ」

「え? なんで?」

俺は田の前に置かれたカクテルをグイッと飲み干すと、女に田をやる。

いつの間にかトロントしていた女の田からは疑問の念が噴出しどこかびっくりしたような声がカウンターに響いた。

「あれを見ろ」

店に飾られた古ぼけた時計を指差す俺。

時計は午前1時を回つたことを示していた。

「・・・もう1時だ。ここからは大人の時間だぜ？」

「まだ老け込むようなトシじゃないでしょ？なーにおじさんみたいな台詞いってんの」

目の前の女は、俺にそう言いつとグラスをクイッと回しながら残った青色のカクテルをグイッと一気に飲み干した。

「子供は門限を守る。お母さんこそそう教わらなかつたのかい？」

「子供扱いしないでよーこれでも私は大人よ」

女は不機嫌そうに立ち上がると怒つたように椅子にかけてあつた上着をとり

店を出て行こうとした。

「待ちなよ。携帯忘れてるぜ？」

ガシッと俺の手から携帯を奪い取り鷺掴みになると、女は酔いつぶれそつになつている俺に向かつてこう言った。

「ありがとう・・・さよなら・・・ヤンセイ」

俺は酔っていたのか、最後の台詞が聞き取れなかつた。

俺の名前を呼んでいたのだろうか？そのまま俺はまどろみの中に墮ちていった。

目覚めたのは夜が明けて、バー・テンの「お密さん、店仕舞です」といつ声だつた。

俺はバー・テンが差し出した領収書を見ると、思わず俺は目を丸くした。

・・・しまつた。飲み過ぎた。

店を出ると、俺はアイツとケンカしたことも忘れて今日が日曜日であることを素直に喜べない強烈な一日酔いが襲う鉛のような手、足、体を押して自宅へと舞い戻つた。

ガチャーン。

玄関に華奢で小さく蹲つていたアイツは俺の顔を見るなり夜中泣きはらしたのであろう顔から、再び小ぶりの雨粒を降らし子供のように俺に抱きついてきた。

「ほんともあれうかと・・・」

俺は目の前に泣きじやぐるアイツに、ポケットからスッヒとハンカチを挿し出す。

・・・目の前に子供のように泣きじやぐるアイツに貰つた想い出のハンカチを。

二日酔いの頭にしては上出来過ぎる用意周到さに我ながら感心しつも

俺たち一人は再び旅路をゆづくりであるが歩き始めた。

でも、いつの間にか癖になってしまったのか。

俺は旅路で躊躇度に例の飲み屋にフラフランと行くよくなつた。

俺が行く度、いつもそこには例の女の客が居た。

知つてゐる顔だと理解しているが思い出せない、いつもそこには  
肩まで伸びた黒髪に赤いスース、黒光りする革靴とブランド物のバ  
ッグを持った女。

旅の小さな躊躇から始まつた、小さな出会い。

いつの間にか、俺はその出会いに染まつていつた。

## 5 私たちの亀裂、大きな代償

私たち二人の旅路も2年が過ぎた頃、去年のあの大ゲンカの日から  
帰つてきた貴方の態度は朗かにおかしかつた。

妙に優しくなつたというか・・・我を通さなくなつたというか・・・  
従順さが増したというか・・・自分を出さなくなつたというか・・・

怪しいと感じた私は、貴方が入浴していることを良い事に

いつものようにコツソリ貴方の携帯を覗き込む。

「それが普通」と、さも常識のように日々貴方の自由を意識的に奪  
つているとはい

この時ばかりは流石の私も罪悪感に苛まれる。

前に大喧嘩したときの原因もこれだつた。

私の些細な猜疑心と嫉妬心。

いつも勘違いなのは知っている、でもやめられない。

私の前に悪魔が現れて勧めるのだ。

甘美な匂いを漂わせながら美味しそうに成る禁断の果実を嚙じれ、  
と。

悪魔の誘いに乗り果実を嚙じる私。

しかし、私は知らなかつた。

禁断の果実を嚙じるといつことだが、どれほど懸かることであるかを。

私はメールの一文を見ると、体中の血液がグツグツと煮え滾る思い  
をした。  
顔は赤色に染まり、世間で言つ鬼のような形相に私は一瞬にして変  
化した。  
私が世界中で一番醜い私になる時だ。

「どうこういとなのよ、これは一浮氣でもしてゐの?...」

入浴後でまだ髪も乾いていない貴方に、メールの一文を見せて申し  
開きを求める私。  
いつもの貴方なら不機嫌そうに反論していくはず、それをさせたら  
コッチのもの。

私は貴方の必死で弁解する姿を見て、どこか快感に似たものを感じ  
ているのかもしれない。

さあ、その言葉を早く言つて、早く、私の目を一心に見つめて今す  
ぐ言つて

「違う、誤解だ、君は勘違いをしている」って。

でも、貴方は私の思う通りの台詞を言わなかつた。

「「」ねん」

貴方の口から放たれた言葉、それは私の中を稻妻のよつて(高速)で過つて

私の何かがピシッと音を立ててビビ割れるよつた思いがした。  
え、ちょっと、なんで、否定してよ。

なんで、なんで、なんで、なんだなのよ！

あやまるなんておかしいじゃない。いつもの調子で反論してよー！

### ピンポーン

あっけにとらわれていた私を尻目に玄関で呼び出しベルが成る音が聞こえた。

「・・・ツ」

玄関へと逃げるよう駆け出したのは私のほうだった。  
今すぐに玄関に行かずにはいられなかつたのだ。  
なぜなら、貴方のメールの最後に来ていた相手からのメールにはこう書いてあつたから。

『今から、あなたの家に行きます』

怒りを始めとしてありある感情が噴出し  
ドアを開けると、そこには肩まで伸びた黒髪と赤いスースを着こな  
した知つている顔が現れた。

「あなたは・・・」

「・・・お久しぶりね、学生以来かしら?」

余りにも知りすぎている顔が目の前に。私の周りの空間が歪む。今まで一步一步確実に歩んでいった足跡が砂嵐で消えていく。辺りは静寂が支配し闇が広がつていった。

私が進んでいく道も、帰るべき道も、闇に飲まれ消えていった。

## 6、旅の終わり。

なぜ私たちの旅路はこうなってしまったのだろう?

永久にも感じられる時は無常にも私に解けない問題を投げかけた。

悪魔は私から貴方を奪い、私は残った『酸っぱくほろ苦くなつた果実』をかみ締めた。

今までの旅路が終わる音が聞こえ、果実には涙の味がした。

でも、そんな私に再び悪魔が語りかけてきた。

「その果実を甘くする方法はあるぞ」と、  
かみ締めていた涙の味のする果実は、悪魔にそそのかされ  
言われるまま憎悪と嫉妬の渦に包まる。

・・・・・

もう、どのくらいたつただろう。

明かりがぼんやりとついているだけ。

ああ、手がこんなに汚れてしまった。

洗わなきゃ。

水道の蛇口をひねる。

冷たい水に手を触ると、みるみるうちに赤くなっていくわ。

洗面台に映る私の顔。

あれ・・・ルージュがはみでてる。

それに全身真っ赤。まるである女の女みたい。

悪魔は事の後、最後に私に甘く囁いたの

「甘くない果実なんて捨ててしまえ」って

朱色に染まつた携帯をスッと取り出すと

まだ青々しかつた私たちの旅路が見え隠れする。

もう終わってしまった旅路なのに。

目的地も決めずに始まったく当てもない旅路。私たち一人の旅路。

携帯を閉じ旅の終わりを告げる辺りに広がる光景に再び目をやる。

嫉妬と憎悪に満ちた私の口一杯に再び広がる

酸っぱくほろ苦くなつた果実の最後の味を噛み締めると

赤い体を引きずりながら、迫る夜の闇へと逃げ出した。

(後書き)

登場人物設定

『私』 高校生 主婦 19歳 女

嫉妬深くて支配欲の強い女。

裕福な家の三人兄弟の末娘として生まれる。  
小中高と通じて親の意向で文学に通う。  
ある時期に『俺』に告白し、見事に射止める。  
その後、一人で生活するが・・・。

「今作一番の自由人、嫉妬に駆られた女は何するかわからない」

『俺』 学校教師 28歳 男

女子高の教師。現代国語担当。

ここぞというところで機転が利くが素直過ぎる。  
融通が利かない。頭良い銀縁の眼鏡キャラ。  
あまり縛られることを望まない。

「今作一番の苦労人、帰つたら飲み物奢つてやるよ」

『私の親友』 高校生 秘書課勤務 19歳 女

『私』の同級生であり親友。

やわらかい物腰と年相応の可愛らしさを持つていて

流暢な言葉使いと物怖じしない性格が売り。

なんでも受け止められる総じて器の大きさもあり

『俺』もそんなところに気を引かれたのであろうか。

物語では描かれなかつたが、実は『私』と『俺』の一人が付き合つていたのを知つて、自分が好きだつた『俺』を奪われ嫉妬が湧き上がり、『俺』を付回すような

ストーカーまがいの行為を何回も行つている。

(バーに行くタイミングでいつもいるのはそのため)

「今作一番の頭脳派、実は結構狡猾な性格です」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5219d/>

---

旅路

2010年10月20日15時24分発行